



Title	存在 を表す形容詞が述語となる文：存在から特性、可能性へ
Author(s)	八亀, 裕美
Citation	琉球アジア文化論集：琉球大学人文社会学部紀要 = Bulletin of the Humanities and Social Sciences University of the Ryukyus(7): 111-128
Issue Date	2021-03-25
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48228
Rights	

〈存在〉を表す形容詞が述語となる文

存在から特性、可能性へ

八亀 裕美

1. はじめに

形容詞は、名詞と動詞に次ぐ第3の品詞であり、文中では規定語（連体修飾語）として機能することの特徴とする。しかし、述語として機能することも、形容詞にとっては重要な機能の一つである。これは、中国語や英語など、異なる類型に属するさまざまな言語において観察される事実であることは、Thompson (1988) や八亀 (2004) でも確認されている。¹

形容詞研究で重要なことは、形容詞だけを見て記述するのではなく、二大品詞である動詞や名詞との関連性を常に視野に入れておくことである。広く類型論でも受け入れられているように、形容詞は二大品詞に挟まれる形で位置づけられ、この三つは連続相をなしている²。奥田 (1988) は文の意味的なタイプとして、〈運動〉〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉〈質〉を取り出すが、形容詞が述語として機能する文は、これらの文の意味的なタイプのうち、〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉の4つのタイプを表す。このうち、中心は、〈特性〉と〈状態〉の二つであり、〈関係〉や〈存在〉は形容詞述語文にとっては周辺的な位置付けとなる（このあたりの全体像は、工藤真由美 2002 に詳しい）。

ここまで、本研究の形容詞述語文の記述は、中心的な〈特性〉〈状態〉からスタートし（八亀 2008 など）、いわゆる比較表現を橋渡しとして（八亀 2014）〈関係〉を表す形容詞述語文へ（八亀 2015, 2018）と進んできた。今回は、〈存在〉を表す形容詞述語文を観察する。

この流れは、一方で、より具体的な表現から抽象的な表現へという流れでもある。〈特性〉や〈状態〉を表す形容詞述語文は、動詞述語文が中心となる〈運動〉などとの比較で考えると、その評価的な性質から、主体性や抽象性は

¹ 言い換えると、日本語では形容詞が用言であるから、という理由ではない。

² Givón (2001) の temporal stability など参照。

高いのではあるが、同じ形容詞述語文の中では、相対的に具体的な表現である。これに対して、〈関係〉は、話し手による関係づけという抽象化があり、また、これから観察していく〈存在〉も、話し手による一般化がつきまとう。

本稿では、〈存在〉を表す形容詞のうち、「多い」と「少ない」を中心に「珍しい」や「希な」なども対象として記述を行う³。これらの形容詞については、久島（2010）、佐野（2016, 2017）、西内（2017）などにも個別の記述はあるが、本稿では、形容詞述語文全体の記述を視野に入れながら、具体的用例から帰納的に記述を進めていく。形容詞論では、語彙＝文法的な記述が動詞論以上に必要になる。本稿は文法論であるが、常に語彙の意味とのからみあい視野に入れて記述をしていく。

記述は、具体的なモノ・ヒトの存在からスタートし、抽象的なモノの存在、さらに特性表現、可能性表現への広がりへと進んでいく。また、合成述語についても観察をする。最後に、今後考えるべき点について整理をする。

奥田（1988）や工藤真由美（2002）が確認しているように、文の意味的なタイプである〈存在〉は、時間的限定性がある「現象」と時間的限定性がない「本質」にまたがる⁴。〈存在〉を表す典型的な述語である動詞「ある」で確認すると次のようになる。

- ・あ、こんなところにゴミがある。 時間的限定性あり 現象
- ・石垣島にはハブがいる。 時間的限定性なし 本質

これに対して、「多い」「少ない」のように、存在の多寡を表す形容詞述語文は、複数ものを一般化し、同じ類としてまとめ、属性⁵の持ち主として差し出す。つまり、話し手による一般化（抽象化）を前提としている。

³ 「ない」については、「ある」との一体的な記述が必要であるため、本稿では対象としない。

⁴ 時間的限定性とは、文における個別・具体性の有無を表すカテゴリーであり、標準語においては、述語の形態変化では明示する手段のない意味的なカテゴリーである。動詞述語文から名詞述語文までの連続的な様相を見せる。また、単に時間的な面だけを捉えているのではなく、話し手による事象の捉え方も深く関係する。詳細は工藤真由美（2002）参照。

⁵ 言語学研究会における「属性」は広くすべての文の意味的なタイプを包括する上位語である。一般に「属性」と呼ばれているものは〈特性〉がほぼ相当する。

- ・派手な服を着ている人が多い。
- ・難しい経営判断ができる社長は少ない。

このため、具体的な存在について述べている場合でも、現象ではなく本質寄りの表現となっている。この点についても、記述をしながら確認をしていく。

後半では、「することが（も）多い／少くない／珍しくない」についても概観し、これらの表現が、可能性表現のモダリティー論につながっていくことを確認する。

用例は、小説の会話文だけでなく地の文からも採取しており、対談や選書などの内容も含んでいる。このため、テンス対立については、特徴的なことが観察される場合を除き、基本的に言及していない（テキストタイプの影響もあるため）。基本的には時間的限定性のない表現であり、典型的なテンス対立はない。

2. ヒトやモノの存在の多寡を表す場合

2. 1 具体的なヒトの存在の多寡

まず、具体的なヒトの存在の多寡を表す例から記述を始める。

先に確認したように、一般に〈存在〉を表す文は、時間的限定性がある場合とない場合にまたがるが、ここで扱う存在の多寡を表す形容詞述語文では、属性の持ち主⁶が最初から複数であることが前提となっている。つまり、複数のものを一つのグループにまとめる、という形で、話し手の思考による一般化があり、時間的限定性のスケールで言うと、〈現象〉よりも〈本質〉に寄っている。

ここで観察する用例は、今回の対象の中では、もっとも具体的であり、〈現象〉寄りの例ではあるが、それでも、次の一般化が進んでいく場合との境界はグレーである。ここに挙げた用例は、話し手が属性の持ち主を一つにまとめる過程が、その現場での視覚や数字などである程度客観的に追跡可能である。

⁶ 言語学研究会では、話し手が、現実世界を一度分析し、「属性の持ち主」と「属性」として再度総合して文を作る、というのが言語活動の基本であると考えている。

- ・宴の会場には大勢の人が詰めかけていた。長岡修と同年代と思われる男女が多い。地元の学校の同級生かもしれなかった。(魔術 80)
- ・繁忙期以外は人を雇う余裕がなく、重治がアシを痛めてからというものの、節子と二人で切り盛りしている状況だ。それが可能なぐらい客が少ない、ということなのだが。(真夏 35)
- ・「顧問といっても、特に何もしてないんです。計測器や機材の管理責任者というだけで、部員も少なくて、古芝君の代はとうとう彼一人になってしまったんです」(魔術 140)
- ・家族連れが多かった。彼と同年ぐらい、つまり小学校五年生ぐらいの子供もたくさんいた。誰もが楽しそうで、大きな声を出してはしゃいでいる。(真夏 5)
- ・祭壇は、庭に面した座敷にもうけられ、まだ読経がはじまって間もないらしく、焼香客は少なかった。(アイロン 64)

2. 2 具体的なモノの存在の多寡

客観的に存在しているモノの存在の多寡について述べている用例は、意外と少なく、典型例が拾いにくい。現時点で、その理由を断言するだけの準備はないが、英語の **many** 同様、「たくさんの／多くの／〇〇が…」の用法の発達との関連も考える必要がある⁷。

次の2つの例はどちらも過去形だが、現在は状況が異なるという含意がある。

- ・吉本(略)昔、日本語でも、橋本進吉という人がいて、古代日本語だから奈良朝以前ぐらいの、平安朝には、かすかにしか残っていないけど、

⁷ 小西編(1989)によると、英語の **many** は、叙述用法は少なく、主語を限定する場合を除くと、肯定文でもほとんど使われない。また、2. 1のヒトの場合についても、典型的な用例が見つかりにくい理由として、同様のことが指摘できる。

・彼女は基本的には素直で気持ちの良い女の子だったし、多くの人が彼女に好意を抱いていた。(国境 42)

奈良朝以前の言葉で、ある種の音韻には、甲類乙類というのがあって、だから、いまよりも母音も多かったんだという説があります。(音楽 32)

- ・「[神社の話] (前略) 小さな鉄棒などもあった。木も多かった」(子ども 59)

次の例のように、「数／量が多い／少ない」という形で出てくる場合は、具体的存在であることを明示している。⁸

- ・[スーツケースなど] 数が少なければどうということはないが、数十個となるとスペースを確保するだけでも大変だ。(魔術 8)
- ・「いやあ、さすがにもう食えねえなあ」畳の上で両足を投げ出した先輩社員がいった。かなり飲んだらしく顔は真っ赤だった。「あの天ぷらが効いた。うまかったけどあんなに量が多いとは思わなかった」(魔術 46)
- ・「パッチワーク用の布地を買いに行くことはありました」／「それはやはり日曜日に？」／「いえ、教室が始まる前ですから平日です。布の量が多いので、買ったならそのままここまで持ってきていたんです」(聖女 309)

2. 3 あるタイプのヒトの存在の多寡

話し手が、「こういう種類の人たち」と判断して種類分けをした人たちの存在の多寡を表す表現であり、「類」の存在であって、一般化が進んでいる。先に見た 2. 1 との境界ははっきりせず連続的であるが、先に見た 2. 1 では、話し手が属性の持ち主を一つにまとめる過程が、視覚や数値によってある程度追跡可能であったのに対し、こちらでは追跡が難しい。

また、「する者(人)が多い／少ない」の場合は「することが多い／少ない」に言い換え可能なケースもあり、後で観察する可能性の表現へと近づいてきている。

⁸ 「多数の／大量の／少数の／少量の」などの記述も視野に入れながら、このあたりの分析を精密化する必要がある。

- ・西洋の哲学者は、難しいことを勉強しているので頭でっかちで、現実のことにはぼんやりしている人が多いのです。(小学生 20) = 「ぼんやりしていることが多いのです」

さらに、興味深いのは、このあたりから「多くない」「少なくない」などの否定表現が増えてくることである。程度性のある述語において、否定表現と対義的な単語との関係は、語彙論や、哲学、認知言語学などの分野で議論がある⁹。さらに、分析には前提など語用論的な考察も必要となるが、現時点では十分な準備ができていないため、まずは用例の整理を進めていく。

- ・すぐれた学者や芸術家には子どものような心を持っている人が多い。私も子どもの精神を持っている。(小学生 25)
- ・キャンプに行って一番の思い出は何かと聞くと、キャンプファイヤーだったという人が多い。(子ども 57)
- ・スーパー・テクノポリス計画推進のためには、少々強引な手も打った。恨んでいるものは多いだろう。(魔術 254)
- ・夫人の気さくな性格に親しい村人の数は増し、家に上がり込んで洗濯や掃除を手伝う女も多かった。(アイロン 59)
- ・「大学教授には長生きする人間が多いと思っていたが、その理由がわかったよ。大学の施設を、自分専用の無料トレーニングジムとして使えるからだな」(聖女 329)
- ・無理もない、と草薙は思った。経験の浅い刑事の中には、多量の出血を見て平静を失う者も少なくない。(魔術 136)
- ・「安定した仕事がなく住居のない人間でも…いや、そういう人間だからこそ、集まってくる場所ってものがあるだろ。路上生活者の中には、そのおかげで辛うじて生き延びている者も少なくない」(真夏 196)

⁹ Castroviejo et al. eds. (2018) など参照。

- ・これも何万匹に一匹というくらい珍しいものです。おそらく一生チョウを採っていても、これを一匹も採ったことがない人のほうが多いんじゃないかな。こういう一匹の個体の中にオスもメスもある「雌雄型」というものを採ったことがある人は、少ないと思います。日本にはおよそ二百種類のチョウがいますが、それらのどんな種類でも雌雄型というのを採ったことがある人は、あまりいませんよ。(小学生 117)
- ・「いや、そういうわけじゃありません。鍵を預かっているからといって、そこまで責任を持とうとする人は珍しいので、感心しているだけです。しかも、結果的にあなたの胸騒ぎが的中したのですから、その行為は褒められるべきだと思います」(聖女 44)
- ・保土ヶ谷くんだりまで総武線に乗ってやってくる客もめずらしかった。(アイロン 14)

次の3つの例は、一連の物語の中で繰り返して表れているが、さまざまな意味で興味深い。最初の例は、「家庭」について珍しいことを述べている。人の集団ということで、ここに挙げておく。二つ目の例も「家庭」について述べているが、評価の基準が示されている。三つ目の例は、実質的には形容詞「珍しい」が述語であると考えてよい。

- ・友達の父親の大半は会社に勤めているか、あるいは専門職に就いていた。母親が働いている家庭は非常に珍しかった。(国境 6)
- ・大抵の家には二人か三人の子供がいた。それが僕の住んでいた世界における平均的な子供の数だった。(中略)六人も七人も子供がいる家庭は稀だったが、一人しか子供がいない家庭というのはそれ以上に稀だった。(国境 6)
- ・僕の通っていた学校では、兄弟を持たない子供はほんとうに珍しい存在だった。(国境 8)

2. 4 あるタイプのモノの存在の多寡

話し手が、「こういう種類のモノ」と判断して種類分けをしたモノの存在の多寡の表現であり、属性の持ち主は「類」である。ヒトの場合と同様に、「する [名詞] が多い／少ない」の場合は「することが多い／少ない」に言い換え可能なケースもあり、可能性の表現に近づいている。

最初の例は、現在は異なることが過去形によって明示されている。

- ・私たちが子どものころ遊んだ路地は、幅一・八メートル（いわゆる一間道路）から三メートルほどのものが多かった。（子ども 16）
- ・十数軒の家屋が張りついているこの一角はみな動揺のつくりになっていて、道路側から観て地下になる一階部分はさすがにしけるため住居ではなく物置にしている家が多い。（アイロン 440）
- ・着ぐるみ—ぬいぐるみでは、いちばん人気はパンダのようだった。大人のお客さんたちのぬいぐるみは、ほとんどみんなが、どこかしら傷んで汚れていた。手がとれていたり、耳が切れていたりするものも多い。（短編 48）
- ・それにテレビのバラエティ番組を見ると、タレントがダラダラしゃべって仲間内でうけて笑っているようなものが多い。あんなのでいいのなら、いくらでもやれそうな気がした。（短編 90）
- ・かつて、雑木、雑草の中で子どもたちは草花あそびをした。そういうあそびができる公園は少ない。（子ども 24）

2.3で「家庭」を人の集団として挙げたが、その関連で言うと、次の「企業」もそちらで扱う方が適切かもしれない。「会社」「学校」なども同様だろう。

- ・推進派の中に長岡のことを快く思っていなかった人間がたくさんいるのは事実だ。計画が頓挫した場合、大きな損失を被る企業なども少なくない。（魔術 101）
- ・企業の中には、社員名簿を極秘扱いにしているところも少なくない。個人情報だからといって、なかなか見せようとしなないことがある。（真夏

3. 出来事の出現の多寡を表す場合

典型的には、「すること／〔出来事名詞〕が多い／少くない／少ない」という形で表れる。

人やものに繰り返し観察される出来事であることから、潜在的に今後も繰り返される可能性の表現であり、同時に人やものの特性づけになっている。これらは、文の意味的なタイプとしては〈存在〉を表す文ではなく、〈特性〉を表す文である。これらのポテンシャルな特性は、何らかのきっかけがあればアクチュアル化する可能性がある。「することが多い」は「することもあり得る」「する可能性がある」と言い換えられる場合もある。

- ・「ネットの住人というのは、名前だけでなく、年齢や性別も偽っていることが多いですからね」（聖女 278）（＝「偽っていることもあり得ますからね」／「偽っている可能性がありますからね」）

ここで観察する文全体のアクチュアル性には、出来事の抽象度（主語のタイプや繰り返しの頻度）によって、グラデーションがある。

このタイプの記述をさらに精密化するためには、「することがある／ない」の記述の精密化が進む必要がある。さらに、いわゆる頻度を表す副詞（「よく～する」「しばしば～する」）などとの関連性も視野に入れた記述が求められるだろう。現象—本質というアクチュアル—ポテンシャルの対立と現実—可能というレアリゼーションとの関係性もきちんと押さえた記述が求められるが、現時点では用例の整理に止まる。

また、このタイプでも「少くない」のような否定表現も観察される。例えば、次の例の「少くない」と「多い」の言い換えなどは興味深い。

- ・「何のためにクサナギが僕に連絡をしてきたか—それを説明するのは少し難しい。一言でいうと、こちらの様子を訊くためにということになるん

だが、彼にはもっと別の下心がある場合も少なくない。いやあ、そっちのほうが多いかな」(真夏 203)

先述の繰り返しになるが、形容詞の否定表現と程度性の問題は、哲学分野も含めてさまざまな議論がある。また、語用論的な面も含めた総合的な記述が必要となるだろう。ここでは、事実の指摘にとどめておく。

- ・「前に伺った話ですと、所謂お見合いパーティだったそうですね。そういう場では、見ず知らずの男性と女性が会話を交わせるための仕掛けが用意されていることが多いと聞いたのですが、やはりそうでしたか。たとえば、順番に自己紹介するといったような…」(聖女 368)
- ・「いろいろですよ。最近の手口としては、すでに始まっている工事に因縁をつけてくることが多いようです。(後略)」(魔術 27)
- ・「たとえば、苛々している人が大勢いるとき、誰かが文句をつけはじめれば、他の人間はもう言わない。そうなることが多いんですよ。他人の怒りに便乗する奴もいるけれど、基本的には、逆に冷静になるくらいで」(ストーリー 84)
- ・ねだり上手と本人が認めているとおり、葛西は気づくと妻のペースにはめられていることが多い。(アイロン 122)
- ・[テレビゲーム] 父親がゲームと一緒に参加している例も多い。(子ども 36)
- ・歴史資料としては二流とみなされているため、子どものあそび文化財が地域の歴史資料館に展示されることは多くない。児童施設でも、きちんと歴史的な展示がされているところは少ない。(子ども 46)
- ・外国の都市では、子どものため地図やガイドブックがどこでも買えるのだが、日本では、保土ヶ谷区のような子どものための「あそび場ガイド」がつくられていることも少なく、また一般の書店にも出ていないようだ。(子ども 66)
- ・「ふうん、あれについてねえ」湯川が遠くを見つめる眼差しをした。この

男がこんな表情を見せるのは珍しい。(魔術 76)

- ・東京のシティホテルの夜は長い。フロントオフィスの夜勤は午後十時からだが、それから客がチェックインすることなどざらだ。日付けが変わってからということも珍しくない。(魔術 5)
- ・「ライターたちが複数のボイスレコーダーを使用するのは珍しくない。多くの場合、故障したときのバックアップだ。(後略)」(魔術 220)

以下の例は、出来事性のある名詞（いわゆる漢語サ変動詞語幹や、動詞のなかどめから派生した名詞など）の多寡を述べている。「事故」や「事件」「災害」などもここに位置づけていいだろう。

- ・その偉大な延髄が直轄するほど、嚙下とは生命にとって重要なのである。ところが、僕はその大事な脳が劣化したのか、誤嚙が多いのだ。(形態 47)
- ・廃材置き場や工事場のような混乱にみちた空間である。このような空間でのあそびは追跡・格闘などのワイルドなあそびが多い。(子ども 19)
- ・水を抜くのを忘れたバスタブで遊んでおぼれる事故も多い。(子ども 54)
- ・日本ではまだ自転車ロードレースはメジャーなスポーツとは言えない。自治体の協力も得られにくいことから、公道レース自体がさほど多くはない。(ストーリー 117)

倒置が起こり、文頭に形容詞が出ると、（これは他の形容詞述語文でも同様のことが観察されるが）文全体への評価的な態度が前面化する。ここで扱っている形容詞では、「珍しい」という形容詞でよく観察され、「驚き」という語用論的な意味が出てくる。

- ・「大声では話にくい場所にいるが大丈夫だ。珍しいじゃないか、おまえのほうから連絡してくるなんて。何の用だ」(聖女 231)
- ・「珍しいですね。コーヒーメーカーは使わないんですか」(聖女 260)

- ・「ふん、温暖化の原因を作ったのは、奴ら科学者じゃないのか」／「それは認めておられるみたいです。だから科学者は反省すべきだと」／「へえ、珍しいな」（魔術 48）

また、関連して、「珍しいことではない」という表現もある。

- ・作家が個展で発表する作品が、実は弟子の手によるものだったというのは、芸術の世界ではさほど珍しいことではない。（聖女 290）
- ・「おまえは大事なことを忘れてる。夫人と真柴氏はパーティで出会ったんだ。友人の元カレと、そんなところでたまたま会ったというのか」／「どちらも独身なら、珍しいことではありません」（聖女 362）

話しあいのテキスト（会話文）や心中語の場合の過去形の例を見ておく¹⁰。時間的限定性がない（特性）表現における過去形の用法と同じことが観察される。すなわち、死者の特性付けになっているか、補語などが死去している表現が基本である。そうでない場合は、非過去形との置き換えも可能である。

- ・「被害者が犯人を脅したというのか」／「たとえばの話です」草薙は言った。「フリーライターという職業柄、他人の秘密を知る機会も多かったんじゃないですか」（魔術 54）〔被害者死去〕
- ・どうせ大賀が遅刻をしたのだろう。あの男は人を待たせることを何とも思わない。残されていたメールによれば、ホテルで秋穂を待たせることも多かったようだ。（魔術 280）〔秋穂死去〕
- ・「(前略) それにあの人は、仕事で知り合った女性やホステスさんらと食事をすることも多かったので、あたしといるところを目撃されたところで、特にどうということはなかったと思います」（聖女 90）〔あの人死去〕
- ・私はここ数年、まとまった休みのとれる年末年始は家をあけて海外で過

¹⁰ 小説の地の文におけるテンス対立は、「語り」の構造論などを参照する必要がある。ここではその指摘だけにとどめる。

ごすことが多かった。(アイロン 347) [=多い]

現在と過去を対比的に述べる場合は、過去形で表す。

- ・「苛められてたのは俺ですよ」／「まあな。でも、そうじゃねえか？ガキの時のほうが我慢することが多かった」／「かもしれないですね」(ストーリー 44)

以上、出来事の存在の多寡を表す場合について、実際の用例を見ながら考えてきた。いわゆる「可能表現」については、日本語学では、多くの場合、ヴォイス論の中で扱われることが多いが、通言語的な視点では、モダリティー論の中で論じられるのがふつうである¹¹。先に述べたことの繰り返しになるが、現象と本質という時間的限定性（物事の個別具体性の有無）というアクチュアリティーの問題と、現実と可能（あるいはさらに必然）というレアリティーの問題のからみあいについて、述語論全体を見渡した形での整理が必要になる。

4. 合成述語「Xが多い／少ない」による特性表現

最後に、少し流れが変わるのだが、合成述語の問題についてここで考えておきたい。

八亀(2018)で、〈関係〉を表す形容詞「同じ」の観察をした際に、典型的な構文は、「AはBとXが同じだ」という形になり、これは〈関係〉を表す形容詞述語文ではなく、Bとの関係性をベースにしてAの特性を差し出す〈特性〉を表す形容詞述語文であることを確認した。

同様に、「多い」「少ない」を述語とする形容詞述語文でも、「AはXが多い／少ない」という形の〈特性〉を表す形容詞述語文が観察される。

この場合、「Xが多い／少ない」全体が合成述語となっている。

このような構文について、二重主語構文として分析する立場もあるが、ここ

¹¹ 例えば、Palmer (2001) や Bybee et al. (1994) など参照。

では、鈴木（1972）などに示されている言語学研究会の考え方に沿って、これらの表現を合成述語として扱う。¹²

ここでは用例を整理する形で、概観だけしておく。形容詞述語文における合成述語の問題全体については、別途改めて論じたい。

まずはじめに、〈個〉の特性表現を挙げておく。

- ・「時間、どれくらいかかる？」節子が訊く。五十四という年齢のわりには皺が少ない。きちんと化粧すれば、十歳ぐらいは若く見えるだろう。（真夏 16）
- ・間もなく、白いシャツの上に黒いベストを着た女性が、神妙な顔つきで草薙の前に立った。化粧気は少なく、髪を後ろで束ねている。三十代半ばと思われた。（聖女 226）
- ・背広姿で、歯の出た、小太りの男だった。白髪は多いが、童顔でもあって、年齢が分からない。（ストーリー 16）

次に、〈類〉の特性表現を挙げておく。

- ・蝦蛄のからは刺が多くて難儀なのでますます喋らなくなる。（アイロン 206）
- ・日本は水が多いし、暖かいので稲作に適しています。（小学生 30）
- ・たとえば、アフガニスタンで僕らが会った人は、みんなこのような顔をしているわけ。ひげが多く、目が落ちくぼんで、鼻が高い。（小学生 133）
- ・「だけど、そこにいるすべての生物の遺伝子を調べるなんてことできるんですか。ただでさえ深海生物は謎が多い。どこに何がいるか、完全に把握するなんてことは不可能ではありませんか」（真夏 32）

¹² 言語学研究会における合成述語の捉え方については、佐藤（2010）も参照。また、「Nがある」についての工藤浩（2000）の議論も参考になる。

- ・単純な「かたち」なら単純な神経系で充分だろう。しかし外骨格系の生物は体節が多いので、より発達した神経ネットワークが必要である。(形態 24)
- ・ところが同じモンゴロイドでも、シベリアのような寒いところへ行くと、顔が平べったくて、目が細くって、鼻も低く、耳たぶも大きくありません。それからこういう人たちはひげも少ない。(小学生 134)

最後に、次の二つの表現の違いは注意しておく必要がある。

- ・沖縄では、弁当屋が多い。 弁当屋の〈存在〉
状況語 主語 述語
- ・沖縄は、弁当屋が多い。 沖縄の〈特性〉
主語 合成述語

形容詞述語文と文の部分については、考えなければならない課題が多い。稿を改めて論じたい。

5. おわりに

以上、「多い、少ない」など多寡の〈存在〉を表す形容詞が述語となる文について、実例から帰納的に記述を行ってきた。

次のような点について、確認をした。

- 1) 存在の多寡を表す形容詞が述語となる文は、属性の持ち主が複数であるという特徴があり、話し手による一般化が前提となっている。
- 2) 具体的なヒトやモノの存在の多寡を表す典型例は少ない。
- 3) あるタイプのヒトやモノの存在の多寡を表す表現は、出来事の出現の多寡を表す表現に近づく。
- 4) 出来事の出現の多寡を表す表現は、〈特性〉を表す表現であり、可能性というモダリティ表現に近づいている。
- 5) 合成述語「Xが多い／少ない」が述語となる〈特性〉表現が観察され

る。

これで形容詞が表す文の意味的なタイプごとの記述は、スケッチの段階ではあるが、〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉のすべてについて概観することができた。

次の段階としては、これらのタイプをもう一度俯瞰して、全体を見渡し、形容詞述語文全体のありさまについて整理することが必要になる。ここまで形容詞述語文を記述してきた中で、〈特性〉を表す形容詞述語文の位置づけが、違う形で整理できる可能性が見えてきている。

また、モダリティー論についても、動詞論との違いを視野に入れた記述が必要である。形容詞述語文で観察される「評価性」とモダリティーの関係について、議論を進める段階に来ている。

これらの課題について、用例を見ながら少しずつ記述を進めていきたい。

最後に、本稿は、2019年8月に聖心女子大学で開かれた研究会での発表内容を元としている。研究会では小柳智一氏（聖心女子大学）および山東功氏（大阪府立大学）より有意義なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる。

また、この論文の最初の一步は、2012年度に、京都光華女子大学の日本語学セミナーの4年生と一緒にとりくんだ「多い」「少ない」の用例収集と分析であった。当時のゼミのメンバー諸氏にお礼を申し上げる。なお、本稿で用いた用例はすべて八亀自身が手拾いで集めたもので、彼女たちが集めた用例は用いていないことを申し添えておく。

【参考文献】

- 奥田靖雄（1988）「述語の意味的なタイプ」琉球大学集中講義プリント、奥田靖雄著作集編集委員会編（2015）『奥田靖雄著作集2 言語学編（1）』所収、pp.106-118
- 奥田靖雄（1996）「文のこと・その分類をめぐって」『教育国語』2-22、pp.2-14、
- 金水敏（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 久島茂（2010）「形容詞の意味-「多い」を中心として-」澤田治美編『ひつじ意味論講

座 1 語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房、pp.173-190

工藤浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」 森山卓郎他 『日本語の文法 3 モダリティ』 岩波書店、pp.163-234

工藤真由美 (2002) 「現象と本質 - 方言の文法と標準語の文法 -」 『日本語の文法』 2-2、pp.46-61

小西友七編 (1989) 『英語基本形容詞・副詞辞典』 研究社

佐藤里美 (2010) 「述語のひろがり 合成述語を中心に」 『国文学 解釈と鑑賞』 75 - 7、pp.50-59

佐野由起子 (2016) 「「多い」の使用条件について」 『日本語文法』 16-2、pp.77-93

佐野由起子 (2017) 「多寡を表す形容詞と存在動詞について」 森山卓郎他編 『語彙論的統語論の新展開』 くろしお出版、pp.33-45

鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房

西内沙恵 (2017) 「「多い」をめぐる制約 - その構造と学習者の使用から -」 『日本語教育実践研究』 5 立教日本語研究実践学会、pp.75-89

仁田義雄 (1981) 「可能性・蓋然性を表わす擬似ムード」 『国語と国文学』 58-5、pp.88-102

八亀裕美 (2004) 「形容詞の文中での機能」 『阪大日本語研究』 16、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座、pp.51-65

八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究 - 類型論的視点から -』 明治書院

八亀裕美 (2014) 「現代日本語における「比較」へのアプローチ」 『甲南大学文学部紀要』 164、pp.13-22

八亀裕美 (2015) 「〈関係〉を表す形容詞 - 「近い」と「遠い」 -」 『甲南大学文学部紀要』 165、pp.11-22

八亀裕美 (2018) 「一致関係を表す形容詞 - 「太郎は次郎と血液型が同じだ」 -」 『甲南大学文学部紀要』 168、pp.3-13

呂雷寧 (2010) 「無意志自動詞表現と「Vる+ことがある／ない」との比較」 『言葉と文化』 11 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻、pp.165-180

Bybee et al. 1994 *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Language of the World*. The University of Chicago Press.

Castroviejo et al. eds. 2018 *The Semantics of Gradability, Vagueness, and Scale Structure*. Springer.

Givón, Talmy. 2001 *Syntax 1 2nd ed. An Introduction*, John Benjamins.

Palmer, F. R. 2001 *Modality 2nd ed.* Cambridge University Press.

Thompson, Sandra A. 1988 A Discourse Approach to the Cross-Linguistic Category ‘Adjective’, in John A. Hawkins ed. *Explaining Language Universals*, 167-185, Basil Blackwell

【用例出典】（アンソロジーやラジオ対談のものなど複雑なケースがあり、それぞれ初出ではなく、実際に用例収集をした文庫版を示す）

「子ども」仙田満 1992『子どもとあそび』岩波文庫

「国境」村上春樹 1995『国境の南、太陽の西』講談社文庫

「短編」日本文藝家協会編 2005『短編ベストコレクション』（現代の小説 2005）徳間文庫

「ストーリー」新潮社ストーリーセラー編集部編 2008『Story Seller』新潮文庫

「音楽」吉本隆明+坂本龍一 2009『音楽機械論』ちくま学芸文庫

「形態」長沼毅 2011『形態の生物誌』新潮選書

「聖女」東野圭吾 2012『聖女の救済』文春文庫

「真夏」東野圭吾 2013『真夏の方程式』文春文庫

「小学生」河合隼雄他著 2013『小学生に授業』朝日文庫

「アイロン」池内紀他編 2015『アイロンのある風景』（日本文学 100 年の名作第 9 巻）新潮文庫

「魔術」東野圭吾 2015『禁断の魔術』文春文庫